

	学校名: 長野県中野西高等学校	
	氏名: 宮澤 まどか	● 実践教科等: コミュニケーション英語Ⅲ
		● 時間数: 4時間
THAILAND	[担当教科:] 英語	● 対象生徒: 高校3年生
		● 対象人数: 37人

1 単元名

「包括的」な社会のために、自分ができることを考えよう

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- (1) タイと日本を比較し、その違いを見ることで、自分の周りとは違うものを「受容する」ということについて考える。(多面的・総合的に考える力、批判的に考える力)
- (2) ODAの働き、JICAの活動について触れ、国際支援について関心を深める。そこから、国際支援の必要性、そこにおける日本の役割について考える。(つながりを尊重する態度)
- (3) APCD(アジア太平洋障害者センター)の活動を通して知った「包括的」という言葉について、包括的社会という言葉について考える。そして「包括的社会」とはどのような社会なのか、そのために自分ができることを考える。(批判的に考える力)
- (4) タイにおける諸問題について触れた後、自分の周囲にある課題について考える。そこから、自分の周囲にある課題解決に向けて、自分ができることを考える。(未来像を予測して計画を立てる力)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための材料を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1) 教材観

本校は昨年度ユネスコスクールとして認可され、校内に ESD プロジェクトチームを設置し、国際交流・異文化理解、環境教育、人権・平和・主権者教育、アクティブラーニングの4本柱を設定し活動している。国際理解教育を行う上で生徒に伝えたいことは「自分に何ができるか考える」という当事者意識を持つ、ということである。世界の課題、自分の身の周りの課題に触れた時に、他人事と捉えず、自分に何かできることは、という意識を持たせることが、国際理解教育を行う上での目標である。

本実践では①自分の目で見て他国を知り、視野を広げ、自分と異なるものを受け入れ、尊重する気持ちを養うこと、②支援というものが一方的に与えるものではなく、相手の立場を支える取り組みであり、相手の存在を対等なものとして尊重するものだということ、の2点を柱として授業を行う。タイという国について学ぶことで、生徒の異文化理解への姿勢を促し、他を受容し理解することの大切さを伝えたい。そして、タイで行われているタイと日本間の支援を見ることで、国際支援への理解、その必要性について考えたい。支援から見えるタイの課題に触れた後、SDGsで見る世界の課題、自分の身の周り、日本に潜む課題について考える。世界の課題、タイの課題、日本の課題と、徐々に生徒に近いものに落とし込んでいくことで、課題を身近なものと感じて考え、生徒自身が考えようとする意識を持ち、課題に向けて自分ができること、自分のこれからの学びと関連付けて考えようとする意欲を喚起したい。

(2) 生徒観

生徒の中には、年に数回行う海外高校生訪問団受入で他国の生徒と交流したり、異文化理解や時事英語といった授業を通して、異文化に触れたり、国際的な事象について学習した経験があるものもいる。そのような生徒もいる一方で、大半の生徒にはそういった経験が無く、外国に興味を示さない生徒も少なくない。学習に対しても受け身の部分が多く、与えられた課題は行うが、自分から考え何かに取り組むという姿勢はなかなか見られなかった。しかし、夏季休業中に本研修でタイに行くことを伝えたところ、休み明けにタイはどんな国だったか、何が面白かったか、授業でどんなことをやるのか、など質問してくる生徒が見られた。

海外に行ったこと、タイという国について興味を持ってくれている生徒たちに対して、自分がタイで見てきたものを伝えることが、生徒たちの一つの異文化体験となり、生徒たちが日本とは違う国を知るきっかけになればと考えた。また、SDGs、タイの課題、日本の課題に触れ、自分ができることを考えることで、これからの自分たちの学びの意味を見出して欲しいと考えた。

(3) 指導観

教師自身が見てきたものを生徒にも可能な限り多く体験させたかったので、写真資料を多く利用した。また、生徒の自主的な発言、活発な意見交換を促すために、フォトランゲージを用いた資料の読み取り、グループによる意見交換、クラス全体での意見交換の時間を全ての授業で設けた。授業のまとめには、生徒自身が授業内で考えたことを振り返ることができるように、自分の意見をまとめるワークシートを全ての授業で配布、記入させた。

加えて、担当学年が高校3年生という進路決定を控えた学年であったことから、自分のこれからの学びの意味、その目的を考えるきっかけになるような発問設定に留意した。こちらからの発問を通して、国際社会に生きていくことになる生徒たちに、視野を広く持つこと、海外やその人々の生活や文化に興味を持ち、違いを受け入れ、互いを認めあいながら、協力・共生していくことの大切さを伝えたいと考えた。

5 評価基準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	・タイの文化や社会を知ることを通して、世界の多様な文化や価値観について理解を深めようとしている。 ・タイが抱える諸問題に関心を持ち、それらの原因、その解決に向けて活動している人について関心を持つことができる。	・タイにおける日本の支援について触れ、国際協力の在り方について考えることができる。そこから、国際協力の必要性について考えることができる。 ・自分の身の回りにある問題について考え、意見を列挙することができる。	・資料(フォトランゲージなど)から必要な情報を読み取ることができる。 ・「包括的な社会」という言葉についてグループで考え、まとめた考えを全体に発表することができる。	・ODAの仕組みについて理解を深めることができる。 ・世界が抱える課題やタイが抱える課題、それに対するJICAの支援について理解を深めることができる。
評価方法	学習の様子・発言・ワークシートの記述・感想			

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	写真から学ぶ「タイ王国」	・タイの雰囲気、文化、習慣などについて興味、関心を持つことができる。 ・タイと日本の共通点、相違点を考えさせる。 ・相違点を挙げていく中で、自分の周りとは違うものについて、「受容する」とはどういうことか、考えさせる。	・タイで撮影した写真を示し、日本の文化や習慣との相違について考える。 ・他国の違い、それに対する驚きを、否定的に見てしまう姿勢について考える。 ＜授業を終えての生徒の感想＞ ・タイの文化と日本の文化を比べると違いが分かるし、面白いなあと感じた。 ・本やテレビで見るよりも実際にその場に行き、体験するのとでは得られるものが違うと思った。
2	タイにおけるJICAの取り組みを通して、国際支援について理解を深める。	・ODAについて理解を深める。 ・タイで行われている国際支援について理解を深める。 ・なぜ国際支援が必要なのかを考える。	・ODAの概要、JICAの活動を理解する。(タイ国内の取り組みを中心に) ・写真から読み取れることをグループでまとめる。(①どんな支援が行われている場所か②なぜその支援が行われているのか) ・各グループで読み取ったことを、クラス全体で共有する。 ・JICAの活動、戦後日本が復興のために支援を受けていたことに触れながら、国際支援のあり方について考える。 ＜生徒の感想＞ ・援助をしようことで、お互いに発展を遂げていくのだと思った。みんなが支え合うことで、困ったときのつながりを得られるんだと思った。 ・ガールスカウトをやっていて、貧しい国に使わない物を送ったことがあるけど、改めてその必要性が分かった。
3	タイでの取り組みから、世界の課題、日本国内で見	・APCDの取り組みから、タイが目指す社会を考える。	・APCDの活動について触れ、タイが目指す社会についてグループ内で意見を出し合い、まとめる。

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

	えてくる課題について考える。	・SDGsについて触れ、世界が抱える課題について考える。 ・タイの課題、世界が抱える課題について考えた後、日本（自分の周り）の課題について考える。 ・「包括的」という言葉について考える。（→自分の周りは包括的と言えるのか、どのような社会が「包括的な社会」と言えるのだろうか。）	・SDGsのロゴと各ゴールを一致させて、世界が抱える課題にはどのようなものがあるのか考える。 ・日本で見えてくる問題についてグループ内で意見を出し合い、まとめる。
			＜生徒の感想＞ ・包括的な社会にするためには、排除しようとする気持ちをなくす必要があると思うけど、難しい問題だと思う。 ・世界にある差別とか問題について見たり考えたりしてきたけど、日本に目を向けると共通する問題も多くて驚いた。 ・抱えている問題は多いけれど、それを解決するためにどれだけの人が行動しているのか疑問に思った。
4	「包括的な社会」とは、どのような社会なのだろう。自分たちが考える包括的な社会と、そのために自分ができることを考えよう。	・「包括的」という言葉の意味について考える。 ・「包括的な社会」とはどのような社会なのか考える。 ・自分たちがまとめた「包括的な社会」のためには何ができるだろうか。	・「包括的」と「排他的」という言葉を比較しながら、それぞれの言葉の持つ意味を考え、グループで話し合う。 ・その言葉と自分が生きる社会を組み合わせ考えてときに、どのような社会になるだろうか。派生図を使ってグループでまとめる。 ・自分たちが考えた「包括的な社会」のために自分ができることを付箋に書く。

7 授業事例の紹介

小単元名【 To make a better place -自分ができることを考えよう- 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月11日(金) 第2限

(イ)実施会場 3年2組 HR教室

(ウ)本時の目標

生徒たちは本時までにはタイの課題、それを支援する日本やJICAの活動、その他組織の活動を見てきている。さらにそこからSDGsを通して世界が抱える課題について知り、自分の周りに潜む課題や問題についても意見を出し合うことで、課題を抱えているということは決して他国に限ったことではないということを考えてきた。

社会の一員としてこれから進んでいく生徒たちに、自分の周りにある問題、世界の問題を他人事と捉えずに、それらについて真剣に考え、できることを考えようとする態度を育てることが本授業の目標である。スケールが大きく、難しいテーマではあるが、「自分にできることは何か」ということを考え、そこから自分の学びが何かにつながる可能性についても意識させたい。

(エ)指導のポイント

① 本時では導入として、何らかの課題に対して活動する人々について取り上げる。「何かアクションを起こしている人」というタイトルで協力隊の活動を紹介することで、他の人の活動を自分ができることを考えるきっかけさせる。

② 生徒の積極的に探究する姿勢を引き出すために、グループごとに資料を読み取り、読み取ったことをクラス全体で共有するという学習活動を設定した。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	これまでの振り返り【3(6)】	前時までの感想(疑問や新たな気づき)をまとめ、クラス全体で共有する。	一斉	前時に考えた、身の回りにある様々な課題について想起させる。	
展開 ① 10分	タイで出会った「何か」のために活動する人【3(3)】【3(4)】	・タイで何かのために活動する人々の写真と、その人に関する説明文を各グループに配布する。 ・写真を見て、あるいは英文を読んで、写真に写っている人	グループ	・8グループで活動。 ・4つのテーマに関し、各テーマ2枚ずつの写真を配布。	・協力して話し合いに参加しているか ・多角的に物事を見ようとしているか

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

		がどんな活動をしているのか、何のために活動しているのかを考える。 ・グループで考えたことを発表させ、クラス全体で共有する。 ・他グループの発表を聞きながら、他のグループの写真についても理解を深める。		・他のグループの写真についても興味を持たせられるように、各自ワークシートにメモを取らせる。	
展開② 15分	「包括的な社会」とはどんな社会だろうか 【3(1)】 【3(2)】 【3(7)】	・前時に投げかけた「包括的な社会」について考える。 ・グループごとにマッピングを行い、意見をまとめる。 ・グループで考えたことを発表させ、クラス全体で共有する。	グループ	・「包括的」という言葉が少し難しいかもしれないので、教師が少し考えるきっかけを与える。 (アジア太平洋障害者センターの所長の言葉から、生徒の意見を引き出したい。) ・グループで出た意見を、一枚の紙にまとめさせる。	・協力して話し合いに参加しているか ・多角的に物事を見ようとしているか
展開③ 15分	自分たちができることを考える 【3(1)】 【3(2)】 【3(7)】	・「包括的な社会」のために世界、あるいは自分の周りから無くしたいと思うこと、そのために自分がやってみようと思うことについて考え、グループ内で共有する。(付箋に書く) ・グループで考えたことを発表させ、クラス全体で共有する。	グループ	・できる、できないにとどめず、自分ならどうするかという可能性も含めて考えさせる。 ・話し合いが停滞してしまわないように、適宜机間巡視を行う。	・協力して話し合いに参加しているか ・多角的に物事を見ようとしているか
まとめ 10分	本時の活動のまとめ 【3(2)】	・本時を通して考えたこと、感じたことをワークシートに記入する。	一斉	・これまでの授業を通して生徒たちに考えて欲しかったことを最後に伝える。	

(2) 授業の振り返り

生徒に「包括的な社会」について、そこから「そのために自分にできること」を考えさせるために少しでもヒントとなるように、タイで出会った「何かのためにアクションを起こしている人」として展開①の部分を設定した。本授業までにODA及びJICAの取り組み、青年海外協力隊やシニアボランティアについても触れてきていたので、そこで実際に活動する人、何のために活動しているのかを知る機会になったのではと考える。

本時の主題は展開②及び③の「包括的な社会とはどんな社会だろうか、そのために自分ができるところを考えよう」であったが、想定していた通り、生徒には少し難しいテーマだったようで、グループワークの最中に教師に助言を求めたり、グループの中で意見が止まったりしてしまうグループがいくつか見られた。しかし、これまでの授業を通してクラスで考えたこと、自分が感じたことなどをつなぎ合わせながら最終的に意見をまとめられている姿が見られたと思う。また、自分の周辺に存在する課題を考えた後の活動だったので、自分の周辺の事例を考えながら意見をまとめようとする生徒もいた。

生徒が一生涯懸命考えようとする姿が見られたにもかかわらず、時間配分の工夫が足りずに生徒が考えるための十分な時間を与えられなかったこと、その考えをクラス全体で共有する時間を作れなかったことは大いに反省すべき点であった。

(3) 使用教材

<「前時の振り返り」スライド 一部抜粋>

前回の振り返り
みんなで出し合った
「自分の周りの課題」

- ・食料自給率の低下(他国への依存)
- ・国債・就職難・少子高齢化と過疎化
- ・所得格差・基地問題・SNSの事件
- ・LGBTへの意識・窮乏日本
- ・税金の使われ方・若者の政治無関心
- ・女性の管理職の少なさ・選挙権制度

前回の振り返り
こんなものも挙がったよね！

- ・批判精神の強い人
- ・幸せのハードルが高い
- ・ジェネレーションギャップ
- ・グローバル化が足りない
- ・豊洲市場移設問題
- ・長野電鉄の運賃が高い

<生徒への問いかけ: 本時のテーマ>

本時のテーマ:
What can we do?

- ① タイで出会った、「〇〇のためにアクションを起こしている人」
- ② 「包括的な社会」について、考えよう！
- ③ 私たちだって「〇〇のために」できる！

<「タイで何かのために活動している人」スライド 一部抜粋>

B: 高石淳一隊員 (SV: シニアボランティア)



- ・日本では高校教師(美術の先生)
- ・4年前に退職、タイへ赴任
- ・高石さんが兼任した当初は、美術の授業が成り立っていなかった
- ・新しいものを調達ではなく、現地ですることをする

C: 吉田圭助さん (シーカ・アジア財団)



- ・シーカ・アジア財団
タイ事務所 職員
(未来プリーの運営)
- ・タイ最大のスラム、クロイトスラムから、ブランドを立ち上げ現地の女性を応援するプロジェクトに取組中

＜生徒への問いかけ：包括的な社会ってどんな社会だろう＞

でも、その前に前回の授業に戻ります ・「包括的な社会」という言葉について話をしました。 ・日本、あるいは自分の周りは「包括的な社会」と言えるのだろうか？ ・そもそも、「包括的な社会」ってどういう意味なのだろうか？	包括的な社会ってどんな社会だろう... ・「包括的」って言葉だけで考えれば、...全体を一つにまとめている様、全てを包含する → 「みんな」 とか、「社会全体」 という言葉が key word!!	包括的な社会と... APCD (アジア太平洋開発銀行) 「みんな」 とか、「社会全体」という言葉が key word!! ・inclusive (包括的) な人権に基づいた社会 ・障害のない人とともに諸活動に参画できるバリアフリー社会 
--	--	---

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

＜生徒たちの感想＞

- ・自分の国が今あるのも、他の国の支えがあってこそそのものだったと思った。
- ・今の社会をより良くするには一人ひとりが「こういう風にしたい」と思うことが大切なのかなと思った。
- ・自国と他国は常識も文化も必要としているものも違うけれど、その違いに気づき、寄り添った支援が必要なのかなと思った。
- ・行ったことのない国の話を聞くのは新鮮で面白かった。それと同時に日本との違いを比較してしまい、日本がどれだけ恵まれているかが分かった。海外で人の役に立ち活躍している方がもっといると思うので、調べてみたいと思った。人を先入観で見ず、身の回りのことから何か役立つことをしたい。
- ・ボランティアで他の人に教えている人もいたり、自分のためよりも他人のために行動している人がすごいと思った。でもそれは自分のためでもあるのかなと思った。人のために何かをしてあげることで自分の存在価値を見いだせることがあるので、winwin の関係であるのかなと思いました。
- ・私は将来理科教師として理科を教えようと思っています。日本で楽しさを教えることも大切ですが、発展が不十分な場所で基礎理科を教えようかと、視野が広がりました。どこの国の子どもたちも面白ことや自分の興味のあることに目を輝かせます。私はその子どもたちの将来の目を伸ばしてあげたいと思いました。



＜考察＞

違いを受容すること、国際協力について考えること、タイの課題を通して自分の周りの課題について考えること、これらを通して包括的な社会とは何か、そのために自分ができることは何か、について生徒に考えさせてきた。生徒の授業での様子、アンケートでの振り返りから、生徒各々でしっかり考えていたように思う。アンケートの抜粋にもあるように、自分の将来と結びつけてそこからの展望を考えている生徒も見られた。しかしその一方で、「一人ひとりが行動することが必要だと思った」や、「他の人のために活動している人がいてすごいと思った」のような、当事者として何ができるかというところまで深

められていないような意見も見られた。問いかけが大きすぎて、自分のこととして考えられていなかった故の意見だと思う。生徒がより深く、自分の将来やこれからの学びと結び付けて考えられるような授業内容、教師からの問いかけが重要なのだと強く感じた。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

【海外派遣前】

- ・国際理解教育を、少しでも自分の体験が伴ったものにしたいと思い、この研修への参加を希望したが、担当教科との関連付け、具体的な授業などは考えることができていなかったのが、派遣前の授業案作成は非常に苦労した。(苦労した点)
- ・タイにおけるJICAの取り組み、見学先などについて可能な範囲で調べたり、情報を提供されたりしていたので、ある程度の情報を持って研修に参加することができた。(良かった点)

【海外派遣中】

- ・実際の国際協力の現場、そこで活動する人々の話を直接聞くことができたので、知識が自分の身となるのを感じることができた。(良かった点)
- ・各日程終了後に、参加者全員で振り返りミーティングを行ったので、自分以外の参加者が感じたことや考えたことを全て共有できた。自分の意見だけでなく、参加者全員の意見を聞けたことは、この研修への参加目的、そこから得なければならないことを日々考えさせられる大変有意義な時間であった。(良かった点)
- ・帰国後の授業をより深く想定しておくことができていれば、各見学先の情報をもっと能動的に得ることができたかもしれない。(反省点)

【海外派遣後】

・海外派遣で得たものがとても多く、どこに焦点を当てて授業を行うべきかの選択に苦労した。(苦労した点)

【授業実践までのPDCAサイクル】

段階	項目
P(計画)	・生徒が「～だと思った」や「～だと感じた」というような単純な感想で終わらないようにするために、生徒への問いかけができるような授業内容を設定する。 ・前時までに学習したこと、考えたことの総括となるような授業内容を設定する。 ・生徒個人の活動とならないように、授業全体をグループワークで構成し、クラス全体での意見共有の時間を設定する。
D(実施)	・視覚からの情報をできるだけ多く提供したかったので、各時間パワーポイントを作成した。また、生徒がその授業内で考えたことを、自分自身でしっかり振り返ることができるようにワークシートで毎時間授業ごとの振り返りを行った。 ・グループワークで授業を実施したが、各意見がグループ内だけでとどまらないように、クラス全体で意見を共有する時間を設定した。
C(検証)	・問いかけを多く行ったので、生徒各々が、教師が投げかけた問いについて一生懸命考える姿が見られた。しかし一方で、グループ内で他の生徒とうまくコミュニケーションをとることができない生徒もあり、意見共有が一方的になっている部分も見られた。また、問いが難しすぎて答えを出すのに苦労している生徒の姿も見られた。 ・授業時間内に予定した内容が終了しないことがあり、生徒の感想記入等の時間を短縮せざるを得ないこともあった。
A(改善)	・問いが難しくなりすぎないように、そうであったとしても生徒が熟考できる時間を与えられるように、もう少し時間をかけて授業を組み立てられれば良かった。 ・教科と国際理解教育を結び付けられるよう、国際理解教育の授業に継続性を持たせられるよう、年間を通した計画が必要だと感じた。

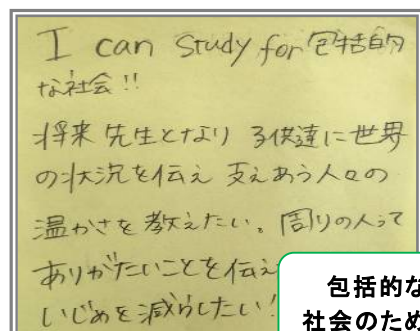
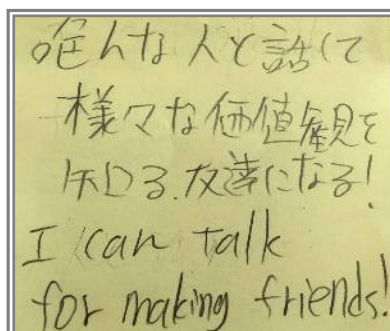
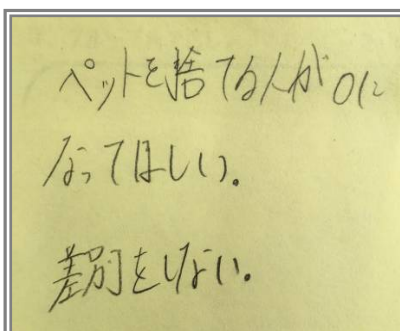
10 教師海外研修に参加して

この研修に参加した一番の動機は「国際理解教育について、自分の実体験を得たい」ということであった。国際理解教育の必要性が高まり、生徒に国際理解教育を行っていく立場として、語ることでできる実体験が無いことがとても苦しいことであった。また、知識だけで実体験のないまま生徒にそれを伝えたとしても、それは生徒に伝わるだけであって、理解まで深まっていけないのではないかという不安もあった。生徒の理解を深めるには、自分の実体験が必要と思い、この研修に参加した。

アジア太平洋障害者センターで聞いた、「inclusiveにしようとすることで、かえってexclusiveになってしまっていないか」という言葉は、授業実践において大きなキーワードとなった。授業を実践した生徒たちは、これから自分で進路を切り開いていくことになる高校3年生であり、これから大学や専門学校に進む生徒たちが、何のために学び、何のために行動するのか、この授業を通して考えるきっかけになってもらえればとの思いもあった。これからの未来を担っていく若者たちへ、という意味も込めて、「包括的な社会とは、そのために自分ができることは」について考えて欲しかった。これまでの授業で考えたこと、意見交換で得たことを踏まえながら、自分たちが考える包括的な社会、そのために自分ができることを、一生懸命考える姿を見ることができたように思う。自分自身がタイへ行き、この言葉を直接聞くことができたから、生徒に本当に考えてもらいたいこととして投げかけることができたのだと思う。自分で足を運び、直接目にする、直接聞くことの大切さを改めて感じた。

今回授業を実践してみて感じたことは、国際理解教育は学校内あらゆる場面での連携が必要だということである。本実践は授業を担当している学級でしか実践することができなかった。世界で起きている問題、世界の共通課題を取扱った授業は、ある教科、それについて関心のある者だけではなく、学校全体で取り組んでいく必要のあることであると考えている。これからの未来を担っていくのは、自分でもあり日々接している生徒たちでもある。広い視野を持ち、世界の課題を、身の周りの問題を他人事と考えずに、何かできることはないかという問題解決意識を持った生徒を育てていくことが、これからの目標である。本研修が生きる場をこの授業だけで終わらせないために、教師として精進していきたい。

本研修で出会うことができたタイチームのメンバー、JICAタイ事務所の方々をはじめ、タイで様々な場所を案内し、いろいろな話を聞かせてくれた方々、すべての方々のおかげで、本当に有意義で貴重な研修に参加できたと感じている。すべての方々への出会いに感謝し、今後も努力していきたい。



包括的な
社会のために